

# 保育者養成における表現科目を通じた学生の学びと意識の変化

—表現の指導法（造形Ⅰ・Ⅱ）を通して学生が獲得する保育者としての専門性とは—

森 下 嘉 昭                      浅 井 拓 久 也

## 1. 研究の目的と背景

山口芸術短期大学保育学科では、教育・保育実習を柱としながら、音楽や造形といった芸術表現に関わる科目を多数開設し、感性や表現力の豊かな実践力の高い保育者養成を目指している。例えば、広く「遊び」を扱う科目を除き、造形表現に特化した科目だけを取り上げても、表現の指導法（造形Ⅰ～Ⅳ）、保育表現技術（造形Ⅰ～Ⅳ）というように、短大2年間で8つの授業が開講されている（平成30年度現在）。一方で、「教職再課程認定」や「保育士養成課程の見直し」にも示されているように、これらの造形表現を扱う科目は、子ども一人一人の発達の特性を踏まえて、遊びや生活を通して子どもが主体的に学ぶことができるような保育を実現するために、より実践的な力を養成段階で身につけることがいっそう求められている。

このような状況の中で、本学のように芸術表現科目に力を入れている養成校の学生が、養成課程の表現の科目においてどのような力を身につけ、保育の専門家としての能力の基礎を獲得していくかという点については、実践的な保育者を育成するためのみならず、授業の質向上のためにも、これまで以上に理解を深める必要がある。そこで本稿では、学生が領域「表現」に関わる科目を受講することでどのような力を身につけ、また意識が変化しているかを明らかにすることを目的とする。本稿の研究を通して、今後の授業内容の在り方や教授方法の改善の示唆を得ることにもなるであろう。

なお、本稿では「表現の指導法（造形Ⅰ）」と「表現の指導法（造形Ⅱ）」を取り上げる。前者は、幼稚園教諭二種免許状及び保育士資格取得の必修科目として開設されており、後者は、幼稚園教諭二種免許状取得の必修であり保育士資格取得の選択必修科目だからである。また、これらの講座は、免許・資格取得に関わる必修、選択必修科目であるため、現在、本学において専門職を目指すすべての学生が履修しているからである。

## 2. 表現の指導法（造形Ⅰ・Ⅱ）の概要

### （1）表現の指導法（造形Ⅰ）の概要

執筆者の一人が担当している「表現の指導法（造形Ⅰ）」は、1年生前期に開講されている。授業の概要は、以下の通りである。

「この授業では、幼稚園や保育所、認定こども園において育みたい資質・能力を理解し、造形表現活動がどのように関係しているか、幼児の造形的な表現にかかわる様々な素材や用具、遊びの体験を通して学ぶ。遊びの場面において幼児は、主体的に素材や用具とかかわりながらどのように表現するか、体験を通して素材・用具の特性を理解するとともに、発達を踏まえた表現の事例をもとに理解を深めていく。また、具体的な準備物や対話の在り方など、保育の初歩的な留意点を学ぶ。」

この科目は、保育者を目指す学生が専門的な知識や技術、保育実践力などを身につけることを目的としている。しかし、入学直後の1年生前期に開講されているため、受講する学生たちは小学校において図工、中学校や高校において美術の授業などをはじめとして、入学までに様々な造形的な経験を経てきており、造形表現に対して抱いている印象も様々であることを前提として内容や教授法を設定している。つまり、造形表現に対してネガティブな印象を持っている学生もいるという前提で、その印象を抱くに至った理由を学生自身に自覚してもらい、意識を変えてもらうことを目指している。

具体的には、保育現場での遊びによく使用される素材や用具を用いて、学生自身が子どもと同じような遊びを体験することを通して、専門知識や技術などの修得はもちろんのこと、保育における造形表現にポジティブなイメージと興味・関心を持ってもらうという、本学の造形表現科目の導人的科目としての位置づけである。当然、授業内において、達成目標に到達することを目指すのであ

るが、単に知識や技術を修得させようとしても、短大2年間では時間的な限界がある。そこで、最初の半期にしっかり時間を費やし、まずはしっかりと興味を持ってもらうことで、1年生後期以降の学び、ひいては就職後も、子どもの造形表現について自ら主体的に学んでいこうという態度、指向性を引き出したい狙いがある。

15回の授業計画のうち、まず初回授業でパスを用いた絵遊びを一つ体験する（絵遊びの定義については、森下・浅井（2018）<sup>11</sup>を参照されたい）。その後、保育者の養成課程において造形表現の科目を設置している理由について、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領を踏まえて、保育における造形表現の重要性とねらい及び内容を示す。この段階では、教育要領や保育指針等からはキーワードのみをピックアップし、絵遊び体験と絡めながら、その後の授業の方向付けも行っている。

2回目から7回目までは、パス、クレヨン、水彩絵の具といった、保育現場でよく見られる素材・用具を用いて、それぞれ絵遊びを体験していく。パスを使用する際には、ひっかけ絵（スクラッチ）やはじき絵（パチック）、クレヨンを使用する際には、こすり出し遊び（フロッターージュ）といった幼児が楽しめる技法遊び（モダンテクニック）も体験する。絵遊びの際は、通常の四角い画用紙だけでなく、ハサミを用いて切ることによって変形した画用紙を用いて遊ぶことで、子どもの意欲を喚起する仕掛けにも興味を持ってもらう。また、こすり出し遊びは、学内を自由に探索しながら行うため、そこに環境とのかかわりや友達との人間関係の視点、言葉のやり取りなどが自然と発生するため、遊びを通して総合的にねらいを達成するという感覚を自覚することもできる。これらの内容においては、学生が体験を通して素材や用具の特性を理解しながら、準備物や環境構成における留意点、どういう時期にどういう流れで行うと子どもがより主体的に遊びに入り込んでいけるかということを踏まえた題材の活用や保育の構想の視点、遊びに見られる子どもの表現に対する言葉かけの視点など、指導や援助における留意点も学んでいくことも狙いである。その後、水彩絵の具の絵遊びからの流れで、8回目には、デカルコマニー、スタンプング、スパッタリング、マスキング、マーブリング、ローラー遊びといった面白い用具

を用いた技法遊びを経験する。ここでは、素材や用具の特性理解や技法そのものの魅力も感じながら、あらかじめ教室内を環境構成しておくことで、学生一人一人が好きな順序で遊びを経験していきながら、特に準備物や環境構成にも着目できるようにしている。9回目は、画用紙、奉書紙、コピー用紙など、身近に手に入る複数の種類の紙を準備し、その活用について学ぶようにしている。主に前期は平面的な遊びに多く着目しているため、使用する素材や用具となると「画用紙に描画材」という固定観念にとらわれがちである。そのため、絵の具を用いた一連の内容が続いたこのタイミングで、一度、支持体としての紙に目を向け、同じ絵の具という素材を使用している、紙が違えばそこに表れる表現も変わること、そのため遊び方の展開が変わってくる可能性があることに気がつくようにしている。このことは、子どもの遊びにおいては支持体の準備の工夫も遊びの幅を広げることを理解してもらいたいという思いがある。

10回目、11回目で再びコンテパステルや水性・油性マーカー（染料インク・顔料インク）といった描画材を用いて、その特性を生かした絵遊びを経験しながら学んでいく。12回目、13回目では、スタンプングとは異なる形で手軽に楽しめる版遊びの材料であるスチレン板を用いたスチレン版画や、紙を切ったりちぎったりして糊で貼りつけて版を作る紙版画などの版遊びを経験する。14回目には、部屋のスペースを広く環境構成してフィンガーペインティングを行ったり、大量の紙コップやペットボトルキャップを準備し、模擬保育室にて造形遊びを行う。特に造形遊びの場合は、子どもたちが素材や場所と関わって遊びながら表現し続けるものの、最終的には作品として形が残らない場合も多いため、造形遊びにおける記録や振り返りを想定した情報機器の利用についても取り上げ、保育での活用について意識できるようにしている。最後の15回目には、パスを用いてステンシルの技法遊びをする。

これら全ての回で、実際に子どもたちが遊ぶ姿はどのようなものか、子どものどのような表現が見られ、保育者はどのように応答していくか、子どもたちが行うときに気を付けておくことは何か、といった内容も、担当教員の保育現場研修での学びも紹介しながら、学生と考えていく。

毎週の授業の復習では、学生らが、これらの授

業内での活動によって手元に残った痕跡(成果物・作品)と併せて授業内容や関連する学びをスケッチブックに記録しまとめていくことで、知識や技術の確実な定着を図るとともに、将来的に就職した際に見返すことのできる自らの参考書を作成していく。15回目のステンシルでの成果物を利用して、各自のスケッチブックにはオリジナルの表紙を製作するようにしている。

## (2) 表現の指導法(造形Ⅱ)の概要

「表現の指導法(造形Ⅱ)」は、1年生後期に開講され、概要については、以下の通りである。

「この授業では、実際の乳幼児の造形表現の事例や成果物(作品等)をもとに、造形表現活動に見られる特徴から乳幼児の発達段階をより詳しく理解し、表現に表れる幼児の気持ちを想定した指導・援助の在り方を考察する。また教育要領、保育指針、教育・保育要領におけるねらい・内容を、具体的な活動と照らし合わせながらより深く理解し、乳幼児が主体的に造形表現活動に取り組めるように、具体的な留意点を踏まえて保育指導案を作成する力を身に付ける」

この授業が開講される1年生後期のタイミングは、前期に付属幼稚園での1日見学実習、県内の複数の協力園との連携による保育所での2日間の見学実習、そして夏季休業中に自宅から通える範囲で複数の園に自主的に依頼して行っている実習など、学生らは複数回の保育現場での経験を経ている時期である。そういった実体験を踏まえていることから、前期よりもある程度子どもの様子を思い浮かべることができるという前提に立ち、15回の授業のうち前半から中盤にかけては、実際の子どもの表現例を見ていきながら、その発達段階に応じた特徴を理解し、言葉かけなどを含む具体的な指導・援助の在り方を探る。また、前期にはポイントとなるキーワードを掻い摘んで取り上げていた幼稚園教育要領や保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領も、それぞれの第1章総則を踏まえながら、表現の領域の記述をより詳しく見ていき、理解を深める。後半は、保育指導案の作成方法について細かく見ていきながら実際に指導案を作成し、模擬保育を実施することを目指す。保育指導案については、実習指導や

その他の授業において学生は基本的な内容を学んでいるが、その内容を基本としながら、造形表現にかかわる指導案の作成上の留意点を具体的に学び、保育を構想するための考え方や視点を理解できるようにしている。

また、1年生後期の授業では、今年度より質問・感想用紙を準備し、毎時間終了時に配布・回収している。これは、昨年度までの授業アンケートにおいて、「質問がしづらい」という回答が複数見受けられたため、その対応策として始めたことである。質問・感想用紙の記述項目としては、その日の授業について「分かったこと」、「質問」、「感想」の3項目である。挙げられたすべての質問に対して、次の授業の際には、教員からの回答を打ち込み印刷したプリントを授業開始時に配布し、受講生が目を通す時間を取っている。回答に対して更に疑問・質問がある場合は、再度質問用紙に記入するようにしている。

この用紙は、毎時間全員に配布しすべて回収しているが、「成績評価には含まないこと」、ゆえに「無記名であること」、「特に質問等が無い場合には、無理に記述する必要はないこと」を条件として伝え、教員からの回答についても、「あくまでも一意見であり、絶対的な正解ではないこと。自分なりの保育観、子ども観を探っていくための参考程度とすること」を、授業内で数回確認している。

前期は、学生自身が造形表現を体験することを通して学んでいくが、後期はテキストや動画、子どもの実際の作品など各種資料をもとに子どもの表現について理解を深めていき、実際に指導案を作成していくことで、保育実践に必要な知識や技術を身に付けていく。

## 3. 研究方法

### (1) 調査概要

調査対象者は、「表現の指導法(造形Ⅰ)」および「表現の指導法(造形Ⅱ)」の受講者(1年生90名)とした。

また、調査方法は、質問紙調査とした。質問紙調査では、選択式(はい、いいえの2件法)と自由記述を設定した。具体的な内容は以下の通りである。

- ① 受講前まで、造形活動(図工・美術)は好きでしたか。

- ② 表現の指導法（造形Ⅰ・Ⅱ）を通じて、造形活動は好きになりましたか。
- ③ 受講前まで、子どもの造形表現に興味はありましたか。
- ④ 表現の指導法（造形Ⅰ・Ⅱ）を通じて、子どもの造形表現に興味を持てるようになりましたか。また、関心は高まりましたか。
- ⑤ 受講前まで、保育における造形表現活動の意義を理解したり、感じたりしていませんか。
- ⑥ 表現の指導法（造形Ⅰ・Ⅱ）を通じて、保育における造形表現活動の意義を理解したり、感じたりできるようになってきましたか。
- ⑦ 受講前まで、子どもの造形表現の発達段階を理解していませんか。
- ⑧ 表現の指導法（造形Ⅰ・Ⅱ）を通じて、子どもの造形表現の発達段階を理解できましたか。
- ⑨ 受講前まで、子どもの造形活動に用いる素材や用具に興味はありましたか。
- ⑩ 表現の指導法（造形Ⅰ・Ⅱ）を通じて、子どもの造形活動に用いる素材や用具に興味を持てるようになりましたか。
- ⑪ 受講前まで、子どもの表現活動に対する言葉かけや関わりの視点を持ち合わせていませんか。
- ⑫ 表現の指導法（造形Ⅰ・Ⅱ）を通じて、子どもの表現活動に対する言葉かけや関わりの視点が持てるようになりましたか。
- ⑬ 受講前まで、子どもの表現活動から、子どもの思いを探る視点を持ち合わせていませんか。
- ⑭ 表現の指導法（造形Ⅰ・Ⅱ）を通じて、子どもの表現活動から、子どもの思いを探る視点が持てるようになりましたか。
- ⑮ 表現の指導法（造形Ⅰ・Ⅱ）を通じて、子どもの表現活動・子どもの造形について、理解が深まりましたか。
- ⑯ 実習先で、授業内容が役に立ったり、授業内容に関係することに気づいたりする場面がありましたか。また、それはどのような内容や場面でしたか。
- ⑰ 実習において、子どもの造形表現活動に関わる際、授業内容を生かしたり、役に立つことがありましたか。また、それはどのようなことでしたか。
- ⑱ 今年度は、表現の指導法（造形Ⅱ）において質問・感想用紙を使用しましたが、役に立ち

ましたか。また、それはどういった点で役に立ちましたか。

- ⑲ 授業を通しての感想を自由にお書きください。

調査期間は、質問紙調査（選択式）については2018年12月19日・20日の授業時に質問紙を配布し実施、即日回収した。回収率は100%であった。また、自由記述については、10月3日から12月20日までとした。

## （2）分析方法

選択式に関しては、単純集計を行った。自由記述に関しては、KH Coderを用いて計量テキスト分析を行った。

## 4. 結果および考察

### （1）選択式の項目に関する集計および分析

まず、①から⑱までの質問（選択式）の回答を集計すると、表1のとおりである。また、⑯から⑲の自由記述の頻出語（表2～5）及び共起ネットワーク（図1～4）を以下に示す。

表1 選択式質問に対する回答結果

	はい	いいえ
① 受講前まで、造形活動（図工・美術？）は好きでしたか。	46 (51.1%)	44 (48.9%)
② 表現の指導法（造形Ⅰ・Ⅱ）を通じて、造形活動は好きになりましたか。	81 (90%)	9 (10%)
③ 受講前まで、子どもの造形表現に興味はありましたか。	51 (56.7%)	39 (43.3%)
④ 表現の指導法（造形Ⅰ・Ⅱ）を通じて、子どもの造形表現に興味を持てるようになりましたか。また、関心は高まりましたか。	90 (100%)	0 (0%)
⑤ 受講前まで、保育における造形表現活動の意義を理解したり、感じたりしていませんか。	13 (14.4%)	77 (85.6%)
⑥ 表現の指導法（造形Ⅰ・Ⅱ）を通じて、保育における造形表現活動の意義を理解したり、感じたりできるようになってきましたか。	87 (96.7%)	3 (3.3%)
⑦ 受講前まで、子どもの造形表現の発達段階を理解していませんか。	4 (4.4%)	86 (95.6%)
⑧ 表現の指導法（造形Ⅰ・Ⅱ）を通じて、子どもの造形表現の発達段階を理解できましたか。	85 (94.4%)	5 (5.6%)
⑨ 受講前まで、子どもの造形活動に用いる素材や用具に興味はありましたか。	34 (37.8%)	56 (62.2%)
⑩ 表現の指導法（造形Ⅰ・Ⅱ）を通じて、子どもの造形活動に用いる素材や用具に興味を持てるようになりましたか。	89 (98.9%)	1 (1.1%)
⑪ 受講前まで、子どもの表現活動に対する言葉かけや関わりの視点を持ち合わせていませんか。	8 (8.9%)	82 (91.1%)
⑫ 表現の指導法（造形Ⅰ・Ⅱ）を通じて、子どもの表現活動に対する言葉かけや関わりの視点が持てるようになりましたか。	88 (97.8%)	2 (2.2%)
⑬ 受講前まで、子どもの表現活動から、子どもの思いを探る視点を持ち合わせていませんか。	11 (12.2%)	79 (87.8%)
⑭ 表現の指導法（造形Ⅰ・Ⅱ）を通じて、子どもの表現活動から、子どもの思いを探る視点が持てるようになりましたか。	84 (93.3%)	6 (6.7%)
⑮ 表現の指導法（造形Ⅰ・Ⅱ）を通じて、子どもの表現活動・子どもの造形について、理解が深まりましたか。	90 (100%)	0 (0%)
⑯ 実習先で、授業内容が役に立ったり、授業内容に関係することに気づいたりする場面がありましたか。また、それはどのような内容や場面でしたか。	55 (61.1%)	35 (38.9%)
⑰ 実習において、子どもの造形表現活動に関わる際、授業内容を生かしたり、役に立つことがありましたか。また、それはどのようなことでしたか。	46 (51.1%)	44 (48.9%)
⑱ 今年度は、表現の指導法（造形Ⅱ）において質問・感想用紙を使用しましたが、役に立ちましたか。またそれは、どういった点で役に立ちましたか。	90 (100%)	0 (0%)



表2 「⑩美習先で、授業内容が役に立ったり、授業内容に関係することに気づいたりする場面がありましたか。また、それはどのような内容や場面でしたか。」に関する頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
描く	28	切る	3	表現	2
絵	25	前期	3	描ける	2
子ども	15	遊ぶ	3	画用紙	2
見る	17	アイスクリーム	2	壁	2
子	14	イメージ	2	膨らむ	2
授業	14	コンテ	2	いつ	1
実習	13	バステル	2	いびつ	1
活動	10	意味	2	いろいろ	1
先生	10	違い	2	お手本	1
遊び	9	円形	2	きれいな	1
保育	8	円形	2	すべて	1
場面	7	園	2	その後	1
声	7	絵の具	2	たくさん	1
分かる	7	学ぶ	2	はい	1
思う	6	関わる	2	アニメズム	1
発達	6	丸	2	オケラスタンプ	1
クラス	5	丸い	2	キノコ	1
ハサミ	5	顔	2	クラッチ	1
作る	5	教える	2	クリスマス	1
使う	5	興味	2	クレヨン	1
飾る	5	月	2	コーン	1
内容	5	見学	2	ジョッペン	1
バス	4	言葉	2	スーバー	1
マーカー	4	広げる	2	ス	1
自分	4	使い方	2	テーマ	1
線	4	習う	2	プレゼント	1
造形	4	出来る	2	ホーム	1
足	4	少し	2	モール	1
頭	4	人	2	扱う	1
年齢	4	水性	2	意識	1
絵描き	3	切れる	2	違	1
言う	3	先	2	引く	1
行う	3	段階	2	雨降り	1
行く	3	知る	2	雲	1
今	3	展示	2	駅	1
色	3	特性	2	援助	1
人物	3	難しい	2	鉛筆	1
水	3	年中	2	応じる	1

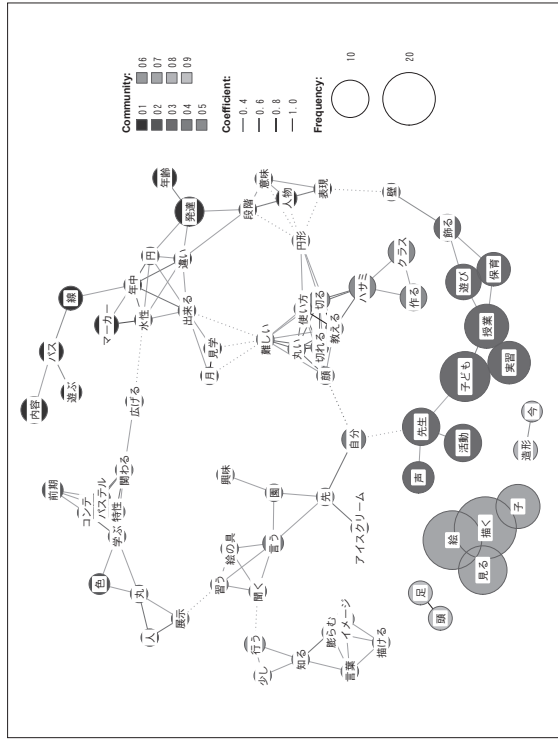


図1 「⑩美習先で、授業内容が役に立ったり、授業内容に関係することに気づいたりする場面がありましたか。また、それはどのような内容や場面でしたか。」に関する共起ネットワーク

表3 「⑩実習において、子どもの造形表現活動に関わる際、授業内容を生かしたり、役に立つことがありますか。また、それはどのようなことでしたか。」に関する頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	31	クレヨン	1	抽出語	出現回数
活動	20	絵描き	2	降らす	1
造形	12	楽しむ	2	因る	1
絵	11	掛ける	2	歳	1
描く	11	危険	2	使用	1
声	9	嬉しい	2	思いつく	1
分かる	9	教える	2	思い思い	1
子	8	広げる	2	指導	1
授業	8	考える	2	視点	1
言葉	7	今	2	意欲	1
遊び	7	最初	2	移せる	1
実習	6	使い方	2	試す	1
ハサミ	5	実際	2	時	1
関わる	5	主体	2	示す	1
思う	5	受け止める	2	自信	1
自分	4	受講	2	自然	1
表現	4	習う	2	自由	1
描ける	4	出れる	2	実践	1
役に立つ	4	場面	2	実例	1
イメージ	4	色	2	取り組む	1
雨	3	生かす	2	受ける	1
学ぶ	3	折り紙	2	周り	1
見る	3	前	2	顔	1
言う	3	知る	2	気持ち	1
仕方	3	適切	2	季節	1
持つ	3	伝える	2	技法	1
先生	3	塗る	2	近く	1
発達	3	服	2	上手	1
アートハイス	2	聞く	2	席	1
スタンピング	2	理解	2	切る	1
意識	2	あ	2	先輩	1
違う	2	立つ	2	全く	1
一緒	2	ありがとう	1	全部	1
援助	2	ありがとう	1	祖母	1
絵の具	2	うん	1	早く	1
		たどり着く	1	促す	1
		ときの声	1	体験	1
		もう少し	1	対応	1
		クラス	1	大人	1
		クラッチ	1		
		行動	1		

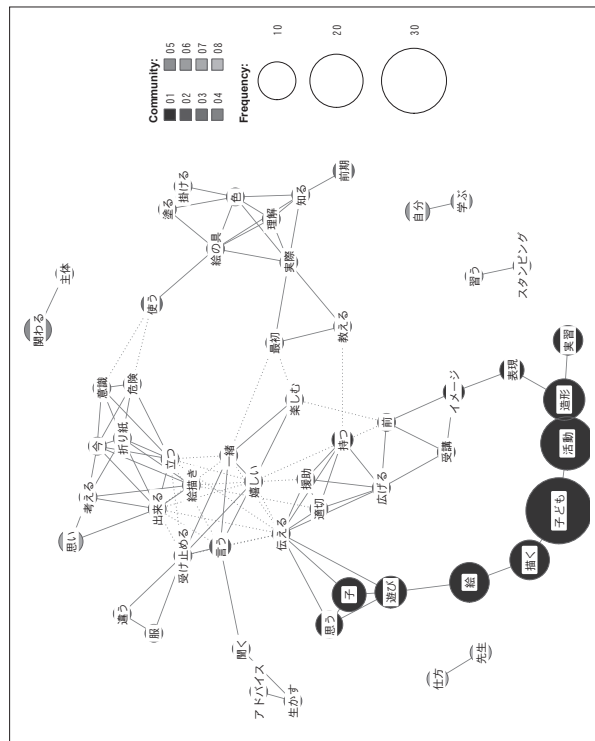


図2 「⑩実習において、子どもの造形表現活動に関わる際、授業内容を生かしたり、役に立つことがありますか。また、それはどのようなことでしたか。」に関する共起ネットワーク



表5 「⑩授業を通しての感想を自由にお書きください。」に関する頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	79	援助	3	嫌い	2
造形	66	過程	3	更に	2
授業	52	関わり	3	構え	2
絵	49	嬉しい	3	行く	2
活動	46	教科書	3	高校	2
思う	40	見せる	3	込める	2
知る	30	行う	3	作成	2
分かる	30	仕方	3	作品	2
発達	24	子	3	使い方	2
描く	24	質問	3	思い	2
楽しい	21	実況	3	思い思い	2
前期	20	状況	3	次	2
表現	20	身	3	書く	2
学ぶ	19	説明	3	将来	2
見る	17	イメージ	3	上手い	2
後期	16	気持ち	3	場面	2
保育	16	教える	3	触れる	2
段階	15	現場	3	心	2
遊ぶ	14	少し	3	心情	2
たくさん	13	美術	3	深い	2
考える	13	勉強	3	深める	2
今	13	幼児	3	人	2
自分	13	下手	4	想い	2
受ける	13	関係	4	大変	2
良い	13	気	4	伝える	2
感じる	11	経験	4	頭	2
理解	11	最初	4	表す	2
興味	10	使う	4	描ける	2
好き	10	視点	4	ときの声	2
指導	10	実践	4	普段	2
実際	10	取り組む	4	間く	2
様々	10	成長	4	毎回	2
内容	9	前	4	満足	2
いろいろ	8	丁寧	4	名前	2
学べる	8	年齢	4	目線	2
言葉	8	変わる	4	役に立つ	2
実習	8	面白い	4	役割	2
詳しい	8	一つ一つ	3	興味深い	2

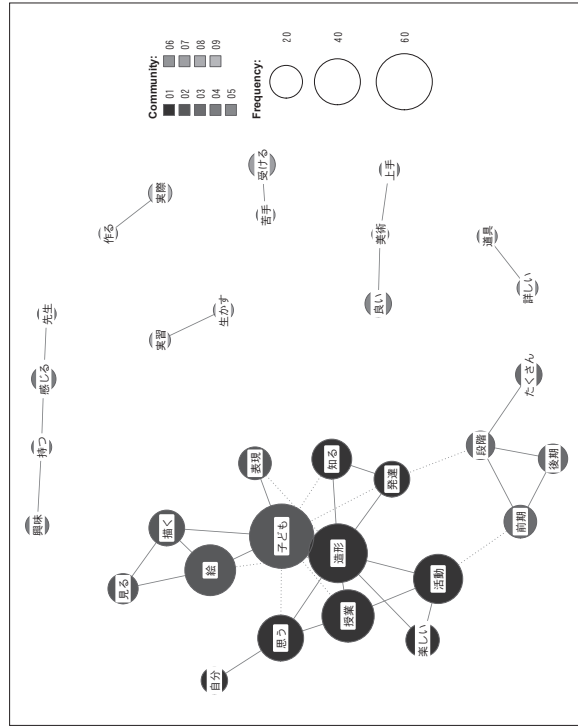


図4 「⑩授業を通しての感想を自由にお書きください。」に関する共起ネットワーク



(2) 表現の指導法(造形Ⅰ・Ⅱ)受講前後の比較  
質問紙の集計結果をもとに、表現の指導法(造形Ⅰ・Ⅱ)の受講前後を比較し、⑯、⑰、⑱の自由記述の回答から特に特徴的な内容を取り上げながら考察する。まずは、①「受講前まで、造形活動(図工・美術)は好きでしたか。」と②「表現の指導法(造形Ⅰ・Ⅱ)を通じて、造形活動は好きになりましたか。」を比較する。①の回答は、「はい:46(51.1%)」「いいえ:44(48.9%)」と、受講前、すなわち短大入学前までは、ほぼ半々の割合で造形活動が好きな学生と好きではない学生がいることが分かる。それに対して②の回答では、「はい:81(90%)」「いいえ:9(10%)」と、造形活動に対する好き嫌いの印象に大きな変化が表れている。

①において「いいえ」と回答した学生が「はい」に変化した理由は様々であろうが、⑱の自由記述での回答を見ると、その一端が記述されている。例えば、「最初は絵を描いたりするのがとても苦手で、人に絵を見せたりするのがとても嫌だったけど・・・」、「正直、授業を受ける前までは、絵を描いたり何かを作ったりすることが苦手でした・・・」、「今まであまり得意ではなく、やらないようにしてきていたのですが・・・」、「私は、中学生の頃から美術の授業に苦手意識がありました・・・」など、受講前までは、学生自身が造形活動に対して苦手であったり得意ではなかったりしていたという記述があったが、そういった傾向の回答の多くは、以下のように続いている。

「・・・今までの美術などの授業と違って、上手下手にこだわらず授業に取り組むことができました。」

「・・・上手下手は関係ないと分かり、これからは気にせず自分らしく活動しようと思うようになりました。」

「・・・けれど、上手下手を気にしないで、自分のイメージしたことをそのまま造形を通して表現することで、達成感や満足感が生まれ、造形ってこんなに楽しいことなんだと気づくことができました。」

「・・・授業を通して楽しさに気づけたり、上手じゃなくても良い、そもそも上手下手がはっきり分かるような活動ではなかったので、すごく気

楽にできました。」

つまり、造形活動が好きではないという学生らの中には、造形活動を苦手であったり得意ではないと思っていたりすることがあり、その理由は、「上手下手」という価値判断基準によるものであること、授業を通じて視野を広げることにより「上手下手」という一つの価値判断基準から解放されることで、造形活動が嫌いではなくなった、ということが考えられる。普通の学生らとの会話から、この場合の「上手下手」とは、多くの場合、「写実的」という意味での「上手下手」という意味であることが推察される。この基準は、学生らにおいては造形活動の大きな判断基準のひとつである印象があるが、とりわけ保育における造形表現の捉え方としては適切ではない。将来保育者を目指す学生自身が、造形活動を捉える視点として、その基準を広げることができなければ、「造形が苦手(下手)だから好きではない」という学生自身が感じていることをそのまま保育活動に投影し、子どもに対しても、原則的に「上手下手」を踏まえた関わりをしてしまうであろう。そのことは、学生自身を追い詰めることにもつながり、ひいては、子どもの表現に対して必要のないプレッシャーをかける原因にもなりかねない。「授業を受けてみると、そんなに難しく考えなくても、自分がその活動がしたいと思えるようになり、とても楽しく造形活動ができていたと思います。その時(子どもと関わる時)には、どうしたら子どもが活動がしたいと思ってくれるのか考えて言葉を掛け、子どもが思い思いに満足できるだけ活動させてあげたいと学ぶことができました。」、「1年間を通して、造形に対しての興味や関心も湧き、造形の見方も以前とは変わりました。」という回答に表れているように、これまでの自分の判断基準やもの見方に変化があったことが、学生らの「好き嫌い」の変化に影響を及ぼしていることも分かった。このような理由によって、造形活動が嫌いではなくなっていることは、保育者を目指す養成校の学生にとっては、有益なことであろう。

また、①において「いいえ」と回答している学生の中には、「絵に興味がなく、子どもとの活動でどうしたら良いか分からなかったけど・・・」、「小・中学校の美術では、何のためにこんなことするんだろう・・・と不満に思いながら絵を描いたり作ったりしていました。」という回答に表れ

ているように、造形活動をする理由が見当たらないから好きではなかった。という学生もいることが分かった。このことは、これらの学生がこれまでの経験の中で、自分を主体として造形活動をした実感を得ることができていなかった、ということが示唆される。しかし、これらの回答は「・・・1から知ること、少し深くまで造形について学ぶことができました。」「この授業で、造形活動をする意味を学びながら活動することができ、途中で、実際の子どもの話を聞いたり見たりできて、楽しむことができました。上手下手ではなく、自分の思うままに表現することは楽しいんだということを、子どもたちに伝えられるようになりたいと思いました。」と続いているように、何のために保育において造形活動が行われているのかを学び、自分なりに考え、納得することで、造形活動が嫌いではなくなっている学生もいることが分かった。さらに、上述の回答からは、自分の意識が変化し造形活動が嫌いではなくなっている学生が、自分自身のことと連動して、子どもの造形活動に思いを馳せていることが分かる。このことは、自身の変化が、将来的に保育現場に立った際の子どもの姿の捉え方や保護者への説明にも影響を与えるであろうことを示唆する。

質問③「受講前まで、子どもの造形表現に興味はありましたか。」と④「表現の指導法（造形Ⅰ・Ⅱ）を通じて、子どもの造形表現に興味を持てるようになりましたか。また、関心は高まりましたか。」の回答においても③「はい：51（56.7%）」「いいえ：39（43.3%）」から④「はい：90（100%）」「いいえ：0（0%）」と、数字の上では①から②への変化と同様、明らかな変化が見られ、授業を通じて子どもの造形表現への興味や関心が高まったことが分かった。この理由については、「授業のこの部分か」という特定した理由を明らかにすることは出来なかった。⑨の自由記述の回答や共起ネットワークから考えると、前期の造形的な遊びの活動体験が楽しいと感じられたこと、体験を通じて材料や用具の詳しい知識を得られたこと、造形を捉える「上手下手」という視点に変化があったこと、後期に、造形表現に見られる発達やその特徴を知ったこと、実際の子どもの表現の様子や表現の痕跡（作品）などをもとに授業が展開することで、子どもの造形活動が表現活動と捉えられる具体的なイメージを持つことができたこと

など、1年間の授業全体を通して、トータルとして興味や関心を高めるに至ったと推察される。

質問⑤「受講前まで、保育における造形表現活動の意義を理解したり、感じたりしていませんか。」、⑥「表現の指導法（造形Ⅰ・Ⅱ）を通じて、保育における造形表現活動の意義を理解したり、感じたりできるようになってきましたか。」についても、⑤「はい：13（14.4%）」「いいえ：77（85.6%）」から⑥「はい：87（96.7%）」「いいえ：3（3.3%）」と大きく変化している。これに関して⑩の回答に「子どもの成長と造形活動はとても大切な関係」、「造形活動は子どもの表現力や創造力を身につけたり・・・」といった記述は散見されるが、保育における造形表現活動の意義についてしっかり書かれている内容は多くはなく、授業の中でこの内容が具体的に身につけているという学生は少ないのかもしれない。しかし、「今まで「絵を描いてるな」という程度の認識でしか見られていなかった」、「授業を受ける前は、子どもが造形活動をする意味について考えたことはなかったけど・・・」、「高校の時のインターンシップでは、ただただ子どもと一緒に絵を描いたり、遊んだりするだけでしたが・・・」などのように、「これまでは、子どもが造形表現活動をする意義などはまったく考えたこともなかった」という学生が、授業を通して「何となく感じ始めている」といったことが、集計結果がポジティブな方向に大きく変化している理由であることが考えられる。

質問⑦「受講前まで、子どもの造形表現の発達段階を理解していませんか。」、⑧「表現の指導法（造形Ⅰ・Ⅱ）を通じて、子どもの造形表現の発達段階を理解できましたか。」については、⑦「はい：4（4.4%）」「いいえ：86（95.6%）」から、⑧「はい：85（94.4%）」「いいえ：5（5.6%）」と、これも大きな変化を見せている。数字を見るだけでも、受講前には、子どもの造形表現の発達段階を理解していないことは明らかであるが、⑩の記述を見ると、「後期は、絵にも発達段階があると知り・・・」、「子どもの造形活動は、発達段階やその時の精神状態をものすごく表す活動であることを知りました。」、「授業を受けてみると、絵にも子どもの発達段階が関係していることが分かりました。」、「子どもが描く絵自体に発達が見られることを知らなかったので・・・」、「子どもの絵などに発達の過程が関わっているのだとは知らな

かった。」など、そもそも子どもの造形表現と発達に関係しているという視点がなかったという記述が多数あった。そのような状態から、専門知識として、造形表現に見られる子どもの発達段階や、子どもの発達と造形表現の関係などの内容を学んだことで、学生らは、子どもの造形表現の発達段階の初歩的な理解を得たと感じることができていると考えられる。

質問⑨「受講前まで、子どもの造形活動に用いる素材や用具に興味がありましたか。」と⑩「表現の指導法(造形Ⅰ・Ⅱ)を通じて、子どもの造形活動に用いる素材や用具に興味を持てるようになりましたか。」については、⑨「はい:34(37.8%)」「いいえ:56(62.2%)」と、もともと約4割弱の学生が素材や用具に興味を持っていたことが分かる。これは、質問①や③の回答にも表れていたように、約半数の学生は受講前から造形活動が好きであり、子どもの造形表現に興味を持っていたことから、納得の結果であった。これが、⑩においては「はい:89(98.9%)」「いいえ:1(1.1%)」となっている。⑨を詳しく見ていくと、「前期では、パスやクレヨン、絵の具を使って、子ども目線で授業を受けることができ・・・」、「前期の授業では、いろいろな素材や道具に触れ、自分自身が体験することにより、気をつけるポイントや必要なこと、ものなどを考えることができ、様々な活動をする面白さを体験することができました。」「絵遊びの授業を通して、直接道具に触れることによって、その道具の使い方や特徴を具体的に知ることができ・・・」などの記述があり、特に、前期の造形的な遊び体験の中での幅広い素材や用具の経験は、学生らの興味に大きく影響を及ぼしたことが分かった。それらの経験を通じて「面白さ」を感じることができたことも大きな要因と言えよう。また、「身近にあるものから、普段あまり使わないような物まで使って造形活動ができたので、保育の現場で様々な時や場所、状況に応じて使い分けていきたい」、「子どもの頃から何気なく使っていた道具についても詳しく知ることができ、良かったです。」「知らなかった道具をたくさん知ることができたので、造形を通して遊びの幅が広がりました。」などの記述もあり、「自分たちが幼児期に実際経験してきたことのある素材や用具を再び体験し、より詳しく学び、知ることができた」という喜びと、「これまで経験

したことのない素材や用具を経験できた」という面白さも、質問⑩の回答においての大きな変化に繋がっていることが分かる。

質問⑪「受講前まで、子どもの表現活動に対する言葉掛けや関わりの視点を持ち合わせていましたか。」と⑫「表現の指導法(造形Ⅰ・Ⅱ)を通じて、子どもの表現活動に対する言葉掛けや関わりの視点が持てるようになりましたか。」についても、⑪が、「はい:8(8.9%)」「いいえ:82(91.1%)」から⑫「はい:88(97.8%)」「いいえ:2(2.2%)」と、受講前後で大きく変化しているが、これについては、授業内容と実習での経験や学びとの関係を探る⑬、⑭の自由記述の内容を併せて見ていくことで、この変化の理由がよりはっきりと見えてくる。例えば、⑬や⑭の質問の自由記述回答に、「何を作ったの?」「いつ見に行ったの?」など、(イメージや会話を)広げる質問を投げかけながら関わるすることができました。」「子どものイメージが膨らみやすい声掛けをするということを知っていたので、自分も近くにいる子どもにやってみると、子どもたちはさらに嬉しそうに話してくれたし、前よりももっと描くことを楽しんでやっていた。」「絵を描く活動で、なかなか描けない子への言葉掛け。」「絵を描く活動の際、「何描いて良いか分からん」「もう描けん」と言っている子どもに対して、授業でよく聞いた言葉掛けなど試してみると「あ、そっか」と言って、活動を発展させてくれました。」など、自分自身が「対応できた」という小さな成功体験に関わる回答が多数あることや「お絵描き帳にお絵描きをする際の、先生の子どもへの声掛け。」「イメージが膨らむような声掛けを、先生方は工夫してやっておられた。」「出来ていない子どもに保育者がすべて手を差し出すのは、その子のためにならないと、授業で感じるようになっていたので、6月の保育見学実習先で、仕事が難しそうなお男の子に先生が適切な援助をしているのを見て、理解が深まりました。」「保育見学実習で造形活動の場面があり、先生方の声掛けの仕方などが授業と関係していると思った。」など、実習先の保育者の言葉掛けに注目する回答から、授業で行った内容が、実習先での体験や出来事と結びつくことで、言葉掛けや関わりの視点が持てるようになった、深まったという実感を得ていると考えられる。また、「先生が先にお手本として絵を完成まで描き、「これ描

くよ」と言って、絵を前に貼っていました。その日は、自分の眼で見たものを描く活動でしたが、子どもたちは先生の絵を見て同じように描いていました。」という回答から、授業で採り上げた言葉掛けや関わり的事例は、ノウハウとしてだけではなく、保育者の言葉掛けと子どもの行動の様子を結び付けて捉え、自分なりに考える視点の獲得にも寄与していることを示唆する。また、「今まで、絵を描いて遊んでいる子や造形活動をしている子、何か困っている子に対して、どんな言葉掛けをしたらいいのか分かりませんでした。先生がたくさんの道具や材料を知っておいたりすることで、子どものイメージを膨らませることができたと思います。」「実習園で、コンテパステルを使った造形活動をされていて、前期授業でコンテパステルの特性や応用について学んでいたの、特性を踏まえて子どもと関わる事ができた。」など、学生自身が素材や用具に詳しくなることで、子どもとの関わりが質が変わることを感じている学生もいることが分かった。

さらに、子どもの表現との関わりについて⑩の回答には、以下のような感想があった。

「小学校の頃は、好きな漫画を模写し、中学校の頃は想像画を描くようになり、高校生の途中までは絵を描くことが苦手な子に手を加えたりしていました。何がきっかけだったかは覚えていないのですが、高校3年の途中から、絵は教えるものでもないし、得意不得意でもない自由なものなんだと思うようになりました。しかし、この授業は「指導法」という名前なので、「表現」を「指導」すると「個性」はどうなるのかと不思議に感じました。でも、授業を受けるうちに、子どもの目線で、子どもになって、子どもの心を考えることで、「指導」という言葉の意味の受け取り方が変わりました。保育での指導は、子どもの絵を先生の絵にするのではなく、子どもの絵が、先生の言葉によって大きく想像を広げることだな、と思うようになりました。今の自分は、造形について子どもの前に立って実践したこともなければ、見た回数もわずかですが、実践を積んで、いろいろな発見からたくさんの考え方をもち、子どもの想いを最大限に引き出せるようにしていきたいと思います。」

この回答から、受講前に学生が抱いている「指

導」という言葉のイメージも伝わってくる。それは、学生は「指導」という言葉に、子どもの個性を殺すほど「先生の思いを指示・命令する」という意味合いを感じているということである。もしその捉え方が正しいとするならば、保育指導案の「指導」という言葉は、教育要領や保育指針の理念に反する。しかし、この言葉を「子ども自身が自分を十分発揮できるように導くこと」と捉えると、関わり方は変わってくる。「指導」という言葉に関することは、今年度から実施している質問・感想用紙の中にも、複数の同様な意見があり、「あまりいい印象をもっていなかった」という学生もいた。こういった言葉一つについても、学生が意識を変えることで、将来的に子どもと関わる際には、大きな違いとなって表れてくるであろう。

一方で、⑥や⑦の自由記述の回答に「実習の中で造形に関わることができたのが、最初の見学実習（1年次5月）の時のみだったので、まだ実際の行動に移せていません。」「実習で、造形をしなかった。」「活動する場面がありませんでした。」「実習先で、造形的な活動がなく、見る事ができなかった。」というものもあった。このことは、保育における造形表現活動の捉え方が、いわゆる「一斉保育」や「設定保育」の場面のみに限定的になっている学生もいることを明らかにしている。手指や身体を使いながら「物の色や形、質や量、位置などに変化を及ぼす」<sup>2)</sup>ことが造形活動であるとするならば、遊びや生活の中でそのような場面に遭遇しない日は考えづらい。保育における子どもの造形表現は、そのような中に「素朴な形で行われることが多い」<sup>3)</sup>ので、決して一斉保育や設定保育での描く活動、作る活動、造形遊びに限られるわけではなく、生活の中に表れるすべての場面において捉える目が必要である。そうして捉えた子どもの様子と、いわゆる「10の姿」を照らし合わせながら、総合的に考えていくことが肝要であるが、これらの回答から、表現の指導法（造形Ⅰ・Ⅱ）の授業を通じて、その考え方に至ることができなかった学生もいることが分かった。質問⑩「実習先で授業内容が役に立ったり、授業内容に関係することに気づいたりする場面がありましたか」や⑪「実習において、子どもの造形表現活動に関わる際、授業内容を生かしたり、役に立つことができましたか。」の選択式質問の集計結果が⑩「はい:55 (61.1%)」「いいえ:



35 (38.9%)」、⑦「はい:46 (51.1%)」「いいえ:44 (48.9%)」となっていることも、上述のようなことが原因として関わっているかもしれない。

質問⑩「受講前まで、子どもの表現活動から、子どもの思いを探る視点を持ち合わせていましたか。」、⑭「表現の指導法(造形Ⅰ・Ⅱ)を通じて、子どもの表現活動から、子どもの思いを探る視点が持てるようになりましたか。」については、⑬「はい:11 (12.2%)」「いいえ:79 (87.8%)」から⑭「はい:84 (93.3%)」「いいえ:6 (6.7%)」と、大きく変化しており、学生らの多くは、授業を通じて子どもの表現活動から子どもの思いを探る視点持てるようになったと感じていることが分かる。⑦の自由記述に関わる図2の共起ネットワークを見ても、「思い」「考える」「受け止める」「出来る」という語句は関連をもって出現していることが分かる。また、その自由記述の詳しい回答を見ても「・・・子どもの思いを考えて声掛けをすることができました。」「子どもの主体的な活動や思い思いの表現を大切にしながら関わることができた。」「気持ちや少しでも理解して対応しようとすることができた。」など、子どもの造形表現と関わる際に、子どもの主体的な思いを考えながら関わることができた、と漠然とでも感じている学生がいることが分かった。そのような中でも、より具体的に「子どもたちが自分(私)の絵を描いてくれた時に、その日の服とは全く違っていたのですが、違うことを指摘するのではなく「かっこいい服だね、ありがとう」などと、まず受け止めることができました。」と、大人目線で客観的な整合性がないこと(当日の服装と絵の服装の柄が違う点)を指摘するのではなく、実習で園にやってきた先生に絵を描いてプレゼントしたい、先生と関わりたいという思いを表現してくれた子どもの思いを受け止めることができたという学生や、「実習先で自由遊びの際に、一緒に絵を描いていた子が完成した絵を見せてくれたので、「〇〇のところ、丁寧に出来てるね」と、子どもが工夫している点を見つけて伝えると、その子は「うん、ここ頑張った!」と嬉しそうに言ってくれて、子どもの視点に立ったり、思いを受け止めるというのは、こういうことなのかなと思いました。」と子どもが頑張ったところはどこか、という視点から子どもの思いを探ろうとする姿勢を持って関わることができたことを実感している学

生、「今までだったら「上手～」としか言えなかったけど、もう少し具体的な言葉掛けが出来るようになったこと。また、何でこの絵をこういう風に描いたのか、思いを考えながら見るようになったこと。」というように、絵から思いを探る姿勢を自覚している学生もいることが分かった。以上のことから、授業内で学んだことを、実習において確認したり実践したりすることで、「子どもの表現から思いを探る視点の獲得」という自分の成長・変化を感じ取っていることが分かった。

⑮「表現の指導法(造形Ⅰ・Ⅱ)を通じて、子どもの表現活動・子どもの造形について、理解が深まりましたか。」の回答は、「はい:90 (100%)」「いいえ:0 (0%)」となっているが、これについては、ここまでの回答を総合的に振り返ると明らかであろう。

### (3) 自由記述に見られる学生の学びや意識の変化

ここまで、受講前後の比較をする中で、⑬、⑦、⑨の自由記述回答に書かれた内容も採り上げながら述べてきたが、ここで⑨「授業を通しての感想を自由にお書きください。」の回答そのものに着目してみたい。なぜなら、ここに授業を通して学生が最も印象に残ったこと、思い浮かべることが表れると考えるからである。

表5において⑨の回答の頻出語句を見てみると、圧倒的に「子ども」が多く、抽出された頻出語句の出現数と出現の仕方を図4の共起ネットワークで確認すると、「子ども」という語句が、「造形」「発達」「表現」という言葉と強く結びついて表れていることが分かる。学生らは、表現の指導法(造形Ⅰ・Ⅱ)を通じて、保育における造形活動の主体となる対象は「子ども」であること、その造形活動は子どもの「表現」のひとつであること、そしてその表現は子どもの「発達」と深く関係していることを意識できるようになっていることが分かる。

また、「この授業を通して、造形の知識だけでなく、なりたい保育者のイメージが浮かんできました。造形が好きになりました。」という回答が出てきたことは、授業の効果として大切に捉えたい。この授業は、造形的な要素や知識・技術を扱う上に、学生自身が作ったり描いたりを体験する内容もある。しかし、学生の造形表現技術を高めることではなく、子どもの造形に関わる表現の指導法を身に付けることがメインの目的である。そ

れは、造形美術の専門家になることが目的ではなく、保育の専門家になることが目的だということである。そこには、「保育者が子どもにいかにか造形表現を教えるか」という視点ではなく、「保育者が、生活の中にある子どもと造形の関わりをどのように捉え、子どもの表現とどう関わるか」という視点が必要となってくる。つまり、「上の立場の教える側の保育者が下の立場の教わる側の子どもに教える」のではなく、「一人の人間としての保育者が、一人の人間としての子どものとどう関わるか」という視点が必要なのである。造形表現に関わる知識や技術だけでなく、どのような保育者になりたいかといった保育者像を、造形表現の授業からイメージができたということは、表現の指導法（造形Ⅰ・Ⅱ）が、保育者養成校の表現科目としての外的外ではないことを示唆する。

#### （４）質問・感想用紙の自由記述

2018（平成30年度）年度後期の表現の指導法（造形Ⅱ）では、質問・感想用紙を授業ごとに配布し、その日の授業で分かったこと、質問、感想について記述することができるようにした。これらの記述内容も、本稿の質問紙として採用した。質問紙調査の⑩「今年度は、表現の指導法（造形Ⅱ）において質問・感想用紙を使用しましたが、役に立ちましたか。また、それはどういった点で役に立ちましたか。」の集計結果には、「はい：90（100%）」「いいえ：0（0%）」とあり、この試みは少なからず学生の学びに影響を与えていることが示唆されるからである。この理由は様々であるが、⑩の自由記述を見ると、「分からなかったことが、理解できるようになった。」「疑問が解消された。」など、授業内で疑問に思ったことを、この質問・感想用紙で質問することによって解決することができたという回答が多数あった。また、「自分では気付かなかった疑問にも気づくことができたから。」「疑問に思っていたことや、自分は考えていなかったところを他の人が質問しており、分からないところが分かりとても良かったです。」など、自分では持ち得なかつた視点について、他者の質問内容から学びとることができたという趣旨の回答も多数あった。そのため、この用紙の自由記述の内容に着目し、そこに表れている学生の学びについても触れておきたい。

後期が始まって間もない10月3日からの記述全

体を概観すると、授業内で採り上げた内容や事例について、当初は、「これまで知らなかった内容を知ることができた」、「〇〇が大切だということが分かった」、という「知識を得た」という趣旨の感想が割合としても多い。また、学生自身のこれまでの実習や自分自身の幼児期の経験から、「〇〇は正しいのか正しくないのか」、「〇〇の場合は、具体的にどうすれば良いのか」というように、子どもの様々な表現場面における「具体的な正解」や「ノウハウ」のようなものを求める質問も多く、具体的に自分が子どもの表現と関わる際にはどのようにすれば良いのか、という点において不安を感じている学生が多かったことが感じられた。特に、「〇〇と言っても、子どもが聞いてくれないときはどうすれば良いですか。」「設定保育の場面で子どもが嫌がった場合、どのようにしたらやってくれますか。」など、極端に言えば「大人の思うように子どもが動いてくれなかったときに、保育者の意のままに子どもを操るにはどのようにすれば良いか」という趣旨の質問もいくつか見られた。授業内において、保育指針や教育要領の内容を採り上げ、そのねらいや内容の視点から解説をしているが、実際の具体的な場面を想定すると、自分だけではその対処法を思い浮かべることができず、初めは保育指針や教育要領と保育実践が結びつかない学生も多いと考えられる。これらの質問一つ一つに、教員が丁寧に回答していくことによって、保育指針や教育要領の観点から、子どもの造形表現を捉える視点というものを、学生が具体的な場面と照らし合わせて理解するきっかけとなるように心掛けた。

そのような積み重ねの中で、徐々に「実習で工作遊びの最中に、自分の思うようにいかず拗ねている子がいたが、声掛けをしても逃げてしまわずずっと泣いたままでした。このような場面でどのように関われば、子どもは楽しく取り組むことができたでしょうか。」「設定保育において子どもが楽しいと思えるには、どのような工夫をしたら良いか。」というように、実習での具体的な場面から、子どもが主体であるとの目線に立ち考察しようとする記述が徐々に増えてくるようになり、11月の半ばを過ぎた辺りから、「感性が育っている」ことは、どうすれば確認できるか。」「小学校の図工の授業と、保育における設定保育等の造形活動は、違うものですか？」など、保育の造形



表現の本質に関わるような質問も出てくるようになった。

「子どもの造形表現への興味」という視点からは、先述の質問紙の③、④の項目の選択式質問の回答の集計数の変化を見た際、そこでは明らかに出来なかったが、質問・感想用紙の記述内容を見てみると、以下のような記述が多数あった。

「私も、サラ粉（粒子の細かい砂）をバケツ一杯になるまで作りたい！と、黙々と作っていた時のことを思い出しました。自己目的だったんだな、と思いました」

「以前母が、3～4歳くらいの時の私の絵を見せてくれて、そこには頭足人が描かれていました。私も同じように発達してきたんだと思いました。」

「家にある（幼児期の）自分の絵と（授業で見た絵が）同じような感じで、驚きました」

「描画の退行現象の話聞いて、自分の弟ができる！と分かったときに、嬉しい反面、ママを取られちゃうんじゃないか・・・と寂しい思いがあり、赤ちゃんかのようにとても甘えていたことを思い出しました」

これらは、学生らが、現在の自分たちから見た他人としての子どもの客観的に捉えて子どもの表現を理解しようとするだけでなく、自分が子どもの頃の記憶や、手元に残っている自分の幼児期の作品などと照らし合わせて、子どもの造形表現というものを理解、解釈しようとしていることが窺える。このことは、学生らに実感を伴う理解を促す可能性もあり、より深く興味を持ち、学ぼうとする姿勢につながっているのではないだろうか。

## 5. まとめと今後の課題

本研究では、表現科目を通した学生の学びと意識の変化を明らかにするため、「表現の指導法（造形Ⅰ）」と「表現の指導法（造形Ⅱ）」の授業を採り上げ質問紙調査を行い、自由記述については計量テキスト分析を行った。その結果、学生は、保育の造形表現に関わり、様々な点について学び、意識を変化させていることが分かった。具体的には、「造形表現活動についての価値判断基準が「写實的に上手か下手か」から、「思いを表現できているかどうか」や「楽しい、やってみたいと感じられているかどうか」、「達成感や満足感を感じら

れているか」といった視点に変化、「何のために造形表現活動をするのか、という意義を自分なりに考えようとする姿勢」、「子どもの表現に見られる発達段階の知識と、子どもの造形表現と発達が関係しているという視点の獲得」、「素材や用具について、初めて使う真新しいものだけでなく、これまでに馴染みのある素材や用具についても、体験を通じて楽しみながらより詳しく学ぶことでの、素材や用具への興味の高まり。」、「子どもの造形表現への関わり方の視点と、具体的な言葉掛けの切り口の獲得」、「なりたい保育者像の獲得」などであった。

一方で、造形表現活動という言葉が示す範囲については、広く生活や遊びの中に見られるものであると考えられていない学生もおり、まだ「設定保育」や「一斉保育」といったイメージでしか捉えることができていない学生も半数程度いる可能性があることも分かった。また、自由記述の分析から、学生らが、当初は授業内容から、知識やノウハウを求めて学びとっていた状態から、自分の疑問の解決だけでなく、他者の質問やそれに対する回答から知識を獲得し、そこから自分の視野を広げている傾向が見られ、徐々に、保育における造形表現の本質に関わるような質問も出てき始めていることが明らかとなった。知識の獲得も、学生の大切な学びであることは間違いない。

以上のことから、今後の課題として、子どもの生活全般を通して子どもの表現を見つめ捉える視点の獲得を、より意識的に推進していく授業展開にしていく必要がある。併せて、保育の専門家として最低限頭に入れておくべき造形表現の専門的知識のより一層確実な定着を目指した授業の在り方も探っていくことも必要であろう。

そのために、自由記述の内容をより詳細に分析し、学生の学びをさらに詳しく理解していく必要もあろう。今年度は、そういった自由記述内にてきた質問に対しても、「教員の一意見」としながらも、教員の回答を示し共有するのみで留めていたが、今後、質問内容からピックアップしたいくつかを学生らに投げかけ、ディスカッションの場を設定することで、より主体的な学びと成長につながっていくことも重要であると思われる。

### 引用文献

- 1) 森下嘉昭・浅井拓久也：造形表現における子どもの創造性に対する批判的考察 ―4歳児の絵遊びの活動を通して―、山口芸術短期大学研究紀要、50、119～126、(2018)
- 2) 花篤實・岡田愨吾：新造形表現 理論・実践編、p.24、三晃書房、大阪(2009)
- 3) 文科省・厚労省・内閣府：平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 原本、チャイルド本社(2017)

### 参考文献

- 1) 浅井拓久也・道源綾香：保育者の専門性確立の過程に関する研究 ―造形表現教育を事例として―、小池学園研究紀要、16、75～83、(2018)
- 2) 無藤隆：育てたい子どもの姿とこれからの保育、ぎょうせい、東京(2018)
- 3) 無藤隆：10の姿プラス5・実践解説書、ひかりのくに、大阪、(2018)